

内記殿進候

〔茶道筌蹄^五〕著用類

火打袋 利休形、アヅキ皮、紐利休茶小刀は堤鞆同様節なし、杉入底、

〔利休茶道具圖繪^下〕指柯^{さすか}燧^{ひうちぎら}杖の寸法

一 燧杖 縦五寸八分縫立なり 横五寸四分縫立なり 一地おらんだもめん

一 裏このみ次第 一 緒色こんびらうど四つ打長さ 五尺^貳つに折[○]圖^の略

一 緒通しあな口より 壹寸三分の所に付る[○]下

〔守貞漫稿^{後集}四〕燧囊[○]圖^略

今製ノ燧囊馬皮朱漆ニテ圖ノ如ク製シ底ノ外ニ燧鐵ヲ造リ付タル物多シ根付ハ売アケト名ケ、牙角或ハ金屬ニテ造之、烟草半灰ノ時是ニアケ、再吸ニ備フ也、此具旅中用ナレバ、歩行ノ間ニ用之コト多キ故也、

此具、烟草入ヨリハ小形ニ製ス、此圖大ニテ誤レリ、[○]圖^略

燧石ト火口ハ囊中ニ納ル、蓋此形ハ民間旅行用ニテ、武士用之ハ稀トス、又燧鐵モ尻ニ付ズ、囊中ニ納ムモアリ、又幅二寸計ノ燕口ヲ縮緬等ノ裁ニテ自製シ、石鐵火口ヲ納レ、懐中スル人モアリ、此形ハ士民トモニ用フ也、

燧箱

〔大和物語^下〕をの、こまちと云人、正月にきよみづにまうでにけり、[○]中^略をの、こまちあやしがりて、つれなきやうにて、人をやりてみせければ、みのひとつきたるほうしの、こしにひうちげなぞゆいつけたるなん、すみにあたるといひけり、

〔古今要覽稿^{器財}〕ひうちげ

ひうちげは燧筒なるべし、今も越後國の農家にてホクチをいれて、腰に佩る物あり、木にて壺